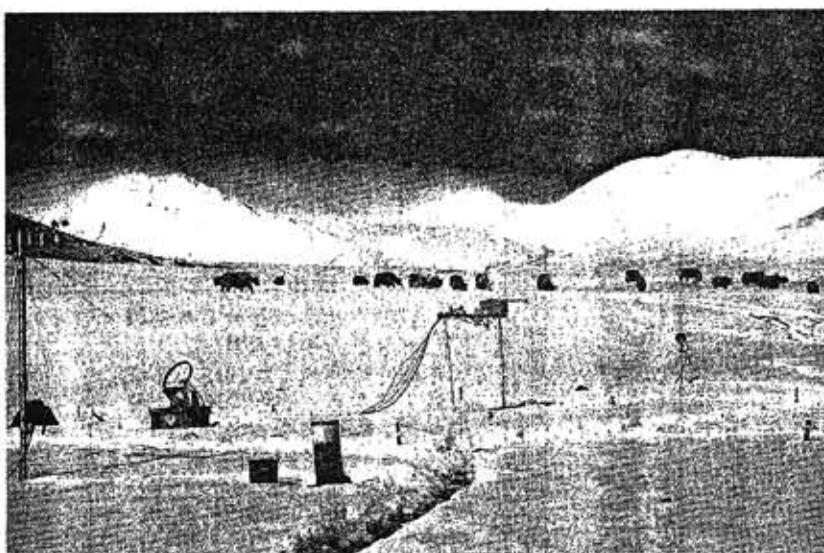


アジアモンスーン



アジアモンスーン地域は、
日本を含む東洋の大陸部に広がる。
大陸は日射で暖まりやすく、海洋は暖まらない
ため、海風と同じ理由で、地上(海面)近くでは印度洋から大陸に向けて大気の流れが生じる。

しかし、標高が高いヒマラヤ山脈やチベット高原が障壁となり、印度洋側からの大気の流れは強制的に上昇させられる。印度洋の暖かい空気は、ヒマラヤ山脈やチベット高原上の大陸に向かって、大陸の上空にはチベット高原圧ができる。大きな気流が形成される。

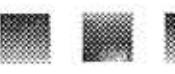
この大気の循環が「アジアモンスーン」だが、これに地球の自転による効果が加わって、竪風や偏西風といった大規模な流れも作り出され、地球全体の気候にも大きな影響を及ぼしている。

たとえば日本では、モンスーン循環が弱いと梅雨が長引き冷夏になり、対的に強いと、上空に張り出したチベット高気圧が日本をすっぽりと覆い猛暑になる。

アジアモンスーンの強弱に関係しているらしいチベット高原の積雪。アジアモンスーンの強弱は、地球全体の気候変動に影響していると指摘されている(一九八九年、安成哲三筑波大教授らが気象観測した際に撮影)

「アジアモンスーンが地球全体の気候システムの形成に大きく影響している」とが最近の研究でわかつってきた。しかし、アジア内陸部の観測網の手薄さから、まだわからない点も多い。来年度から、日本を中心とした十一か国共同観測研究が始まり、その実態解明に取り組む。

(吉田昌史)



ナゾ解明へ11か国連携

来年度からデータ広域収集

され、インドに雨を降らせる。それで、アジアモンスーン循環は、なぜ、年によって強さが変わるので?

筑波大学の安成哲三教授(地球科学系)らが、「一九六七年から二十年間について、人工衛星の観測データを使って調べたところ、中央アジア

の四月の積雪面積が大きい年は、夏のインド全域で降水量

が少なく(モンスーン循環が弱い)、逆に積雪面積が小さい年は降水量が多かった(モンスーン循環が強い)。

積雪面積が大きければ、春から夏の地表と大気の加熱が足りない。シベリアやチベッ

ト高原にある永久凍土の影響も考えられる」という。

アジアモンスーンの実感は、まだ多くのナゾに秘められており、異常気象への影響も無視できない。ペルー沖の現象が夏のアジアモンスーン循環が弱いと起きやすいと

日本の気象学者や水の循環を研究する水文学者らの呼び掛けで、来年度からスタートする国際共同研究「アジアモンスーン エネルギー・水循環観測計画(GAME)」には、中国など十一か国が参加、アジアモンスーン地域の大気や陸地をめぐる水循環の実態などを調べる。

降水量や日射量などを測定する無人観測装置をアジアモンスーンの地域内に二千か所配置するほか、人工衛星も活用して大陸スケールでデータを収集する。

中部大学の樋口敬二教授は、「アジアモンスーンの影響下には世界の人口の六〇%以上が住み、モンスーンによる降水を農業生産に利用している。モンスーンの予測ができるれば、社会的な意義は大きい」と話している。

地球全体の気候を左右

日本の気象学者や水の循環

を研究する水文学者らの呼び

掛けで、来年度からスタートする国際共同研究「アジアモンスーン エネルギー・水循環観測計画(GAME)」には、中国など十一か国が参

加、アジアモンスーン地域の大気や陸地をめぐる水循環の実態などを調べる。

降水量や日射量などを測定する無人観測装置をアジアモンスーンの地域内に二千か所配置するほか、人工衛星も活用して大陸スケールでデータを収集する。

中部大学の樋口敬二教授は、「アジアモンスーンの影響下には世界の人口の六〇%以上が住み、モンスーンによる降水を農業生産に利用している。モンスーンの予測ができるれば、社会的な意義は大きい」と話している。